

登場人物の心情に注意しながら読み進めよう

次の文章は、下村湖人の『次郎物語』の一部です。生後まもなくよその家に預けられた次郎は、生家もとに戻ってから母のお民たみや兄弟となじむことができませんでした。次郎を支えてくれたのは、父の俊亮しゅんすけだけでした。一家の没落ぼつらくにより再び生家から離れ、お民の実家である正木の家で暮らしていた次郎のもとに、ある日俊亮がやって来ました。それは、お民が病気を治すために正木の家に来ることになったと告げるためでした。本文は、それに続く部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

----- 本 文 -----

行数

正木の家の離室はなれが、お民の病室になったのは、それから三日の後であった。その三日間を、次郎は、深くものを考えるような、それでいてそわそわと落ちつかないようなふうで暮らした。

お民は見ちがえるほどやせていた。青白い額ひんの皮膚が、冷たく骨にくっついて、その下から眼だけが澄みきって光っていた。次郎が学校から帰って来てはじめて彼女の病室にはいった時には、彼女はしずかに眠っていたが、間もなく眼をさまして彼の顔を見ると、いかにも寂しく微笑びしょうした。その微笑が、遠い世界からの不思議な暗示のように次郎の心をとらえた。そしてろう細工のような血の気のない唇くちびるの間から、まっ白に浮き出した歯が、なまなましく次郎の眼にしみついた。

病室には、ほとんど正木のお祖母ばあさんがつききりだった。で、次郎には大して用もなかったが、彼は、学校から帰ると、なるだけ病室を遠く離れないように努めた。そして、母のほうからよく見える次の間の片隅かたすみに机を置いて、おさらいをしながら、お祖母さんが何か用を言いつけるのを待っているようなふうであった。

10

彼は、学校の帰りに道草を食ったり、一人で遊びに出たりすることはほとんどしなくなった。遊びに出るにしても、それは大てい従兄弟いとこたちに誘い出される場合に限られていた。そして、そうした場合でも、彼は必ず病室にいるお祖母さんの許しを得てからにするのであった。で、あとでは、従兄弟たちも、次第しだいに彼を特別扱いあつかにするようになり、彼を誘い出すのを遠慮えんりよしたり、忘れてたりすることが多くなった。

だが、彼のこうした態度には、まだかなりの無理があった。病気の母に対する子として自然の感情からというよりは、この場合そうしなければならぬという義務的な気持ちのほうが強かった。だから、従兄弟たちだけで自由にはしゃぎまわっている声がきこえたりすると、彼は

20

変に落ち着かなかった。そして病気の母に対して淡い反感をさえ抱くことがあった。しかし、その反感を、少しでも、顔や言葉に表わすようなことは決してなかった。

彼の変化は、むろんだれの目にもついた。そして、それがあまり著しいので、みんなを驚かせもし、涙ぐましい気持ちにもさせた。

「何といういじらしい子だろう。」

そう言って正木のお祖母さんは、おりおり袖口で目尻をふいた。

「次郎のことだけが心残りだったんですけれど、こんなふうだと安心して死ねますわ。」

お民はよくそんなことを言っただけで、みんなを泣かした。

*お延は、むろん、*誠吉を戒める材料に、しょっちゅう次郎を引き合いに出した。*謙蔵ですら、子供たちがあまりそうぞうしいと、

30

「少し次郎ちゃんに見習って、勉強するんだ。」とどなることがあった。

正木のお祖父さんだけは、不思議に何とも言わなかった。言っているのかもしれないが、次郎の耳には少しもはいらなかった。次郎にとっては、それはたしかに物足りないことの一つであったが、しかし、そのために彼は決して悲観はしなかった。なぜなら、この家で、お祖父さんは彼の第一の味方であり、その第一の味方が、他の人たち以上に彼をほめていないわけではない、と彼は確信しきっていたからである。

ところで、そうした賛辞は、次郎にとって大きなよるこびであるとともに、また強い束縛でもあった。彼はいつも人々の賛辞に耳をそばだてた。そして、一つの賛辞は、やがて次の新しい賛辞を彼に求めさせた。彼は、彼自身の本能や、自然の欲求に生きる代わりに、周囲の人々の賛辞に生きようと努めた。それも彼の本能の一つであったといえないことはないかもしれない。しかし、そのために、彼が次第に身動きができなくなって来たことはたしかだった。しかも、時としては、彼は、そのために、心にもない善行にまで追いつめられることさえあったのである。

40

ある日彼は、おりおりこの村にやって来る顔なじみの肉屋が、近所の農家の前に*目籠をおろして、肉を刻んでいるのを見た。その時は、ちょうど学校の帰りがけで、村の仲間たちといっしょだった。仲間たちは、肉屋を見ると、すぐそのまわりを取り巻いた。巧みな*出刃の動きにつれて、脂気のない赤黒い肉が、まないたの片隅にぐちゃぐちゃにたまっていくのを、彼らは一心に見入った。空がどんよりと曇って、むし暑い空気の中を、肉の匂いがむせるように漂った。

次郎もいっしょになって、しばらくそれを見ていたが、ふと彼は、母が毎日飲む肉汁の事を思い起こした。「鶏の肉汁にはもうあきあきした。何か変わったものはないかしら。」……そう言って眉根をよせながら、肉汁をすすっている母の顔が目には浮かんで来た。「今度肉屋が来たら、一度牛肉にしてみようかね。」——祖母のそうした言葉も同時に思い出された。

50

彼の机の中には五十何銭かの貯金があった。それは学用品代として俊亮にもらったものあまりや、近所にぼたもちを配ったりした場合、先方から使い賃として一銭ずつもらったのを貯めておいたものである。彼はこの貯金のことを思いだすと、急に胸がどきどきしだした。そして大急ぎで家に帰ると、珍しく病室にも顔を出さないうで、すぐ自分の机のひきだしをあけた。そしてその中の小箱から、音のしないように十銭白銅三枚をつまみ出すと、すぐまたこそこそと家を出て、肉屋のいるところへ走って来た。

肉屋は、ちょうどまないたと出刃とを目籠の中にしまいこむところだった。子供たちは、まだみんなその周囲に立っていた。そして、次郎が息をはずませながら、帰って来たのをみると、60
その中の一人が、見物事はもうすんだといったような顔をして言った。

「次郎ちゃん、もっと早く来ればよかったのに。」

次郎は、勢いこんで走って来たものの、妙に気おくれがして、みんなのいる前で、肉屋にもう一度目籠のふたをあけさせる勇気が出なかった。買いにやられたことにすれば何でもないはずだったが、彼は自分の手に握っている金で、どのくらいの分量の肉が買えるものか、その見当がまるでつかなかったのである。彼は、友だちの顔と肉屋の顔とを等分に見くらべながら、しばらくぐずぐずして立っていた。そのうちに肉屋は、彼に*頓着なく、目籠をかついで、正木の家とは反対の方向に歩きだした。同時に、仲間たちもばらばらに散ってしまった。彼らがまた肉屋のあとについて歩くのではないかと心配していた次郎は、それでほっとした。

仲間たちの姿が見えなくなると、彼は急いで肉屋のあとを追った。彼が追いついたのは、ど70
の家からもかなり離れた畑の中の道だった。幸い近くには人影が見えなかった。彼は何度もちゅうちよしたあとで、とうとう思いきって声をかけた。

「肉屋さん、肉まだある？」

「ええ、ありますよ。」

肉屋はふりかえってそう答えたが、目籠をおろしそうなふうには見えなかった。

「少うしでも売る？」

「ええ、いくらでも売りますよ。」

「じゃ、これだけおくれよ。」

次郎は思いきって、握っていた手をひろげて突き出した。三枚の白銅がびっしょり汗にぬれて、掌の上に光っていた。80

肉屋はげげんそうに次郎の顔を見て、金を受け取ったが、すぐ、目籠をおろして、幅一寸長さ三寸ぐらいの肉片をまないたの上ののせた。

次郎はそれをみんな刻んでくれるのかと思って見ていると、秤にかけられたのはその半分ほどだった。それでも秤はおもりのほうがはね上がった。すると肉屋はまたそれをまないたの上におろして、ほんの少しばかり端っこを切りとった。そしてもう一度秤にかけた。今度はおも

りのほうがやや低目になった。すると切りとった端っこの肉を、さらに半分ほど切りとって秤の肉につぎ足した。それで秤はだいたい水平になった。肉屋はその肉をまないたにおいて刻み終わると、からからになった脂肪の一片をそれに加え、竹の皮に包んで次郎に渡した。次郎は、牛肉というものについて、ある新知識を得たような気持ちで、それを受け取った。

彼は受け取るとすぐ、周囲を見まわしながら、それを懐に押しこんだ。そして恥ずかしいような、誇らしいような変な気分を味わいながら、母の病室には行って行った。 **90**

病室には正木の老夫婦のほかに、ついさっきまでいなかったはずの謙蔵がいた。次郎はお祖母さん一人の時のほうがぐあいがいいように思ったが、思いきって竹の皮包みをみんなの前に出した。

「何だえ、それ。」

お祖母さんがたずねた。

「牛肉だよ。」

「牛肉？ どうしたんだえ。」

「買って来たのさ。」

「買って来た？ どこで？」

100

「村に売りに来ていたんだよ。」

みんなは変な顔をして、竹の皮包みと次郎の顔とを見くらべた。

「だれかに言いつかったのかい。」

「ううん。」

「お金は？」

「僕持っていたんだい。」

「お前のおこづかい？」

「そう。」

「何で牛肉なんか買って来たんだえ。」

「母さんが、鶏のスープはもう*飽いたって言っていたからさ。」

110

「まあ、お前は……」

お祖母さんは急におろおろした声になって、ぼろぼろと涙をこぼした。お民の眼にも涙が浮いていた。謙蔵は微笑しながら言った。

「そいつは感心だ。で、どれほど買って来た？」

「三十銭だけど、たったこれっぽっちさ。」

次郎はそう言って竹の皮を開いて見せた。お祖母さんがそれでまた涙をこぼした。

「いや、今日は牛肉のごちそうがたくさんにできるぞ。叔母さんも、さっき*一斤ほど買ったようだから。はっはっはっ。」

謙蔵は、以前のいきさつなどすっかり忘れているかのように朗らかだった。次郎はしかし、それを聞いてちょっとがっかりした。小さな竹の皮に、薄くぴったりと吸いついている赤黒い120肉が、彼の眼にはいかにもみじめだった。

「次郎、ありがとう。じゃ叔母さんを買っていただいたのといっしょにしておもらい。」

次郎は、母にそう言われて、少しまり悪そうに、もとどおり竹の皮包みにひもをかけた。そして立ちあがりしなに、はじめてちらりとお祖父さんの顔を見た。すると、驚いたことには、お祖父さんは、彼がこれまでにまだ見たことのないような渋い顔をして、彼を見つめていた。次郎の誇らしい気持ちは、その瞬間にすっかりけしとんだ。

(生意気なことをするやつだ。)

お祖父さんの眼が、そう言っているような気がしてならなかった。そして、彼の手を持っている竹の皮包みからは、いやな匂いがぶうんと彼の鼻をついた。

彼はその後お祖父さんの前に出ると、妙に手も足も出ないような気持ちがするのであった。130

- 注 *お延……次郎の叔母・お民の妹
 *誠吉……お延の子・次郎より一つ年下
 *謙蔵……次郎の伯父・お民の姉の夫
 *目籠……物を入れる、目の粗い竹かご
 *出刃……肉や魚をおろしたりするのに用いる包丁
 *頓着……深く気にかけてこだわること
 *飽いた……飽きた
 *一斤……約六〇〇グラム

問 題

問い

本文全体をふまえ、次郎のお祖父さん^{じい}に対する気持ちの変化を解答らんの書き出しに合う形で、80字以上 100字以内で書きなさい。

は	じ	め	は	、											

80字

100字